

〈エッセイ〉

What democracy looks like? 民主主義ってなんだ!

——政治学ノート(2)——

生 江 明

キーワード：主権者責任、拒否権、ソーシャル、子ども扱い、多様性

藤原竜也弔辞

演出家蜷川幸雄の葬儀において、俳優の藤原竜也が次のような弔辞を語った。

その涙は嘘（うそ）っぽちゃだろって怒られそうですけど、短く言ったら長く言えと怒られ、長くしゃべろうとすれば、つまらないから短くしろって怒られそうですけど、まさか僕が今日ここに立つことになろうとは想像すらしてませんでしたよ、最後の稽古とかね、言葉で…蜷川さん、弔辞。

5月11日、病室でお会いした時間が最後になってしまうとは、先日、公園で一人、ハムレットの稽古の録音テープを聞き返してみましたよ、恐ろしいほどのダメ出しの数でした。瞬間にして心が折れました。「俺のダメ出しで、お前に伝えたいことはほぼ言った。今は全て分かろうとしなくても、いずれ理解できる時が来るから」と。「そしたら少しは楽になるから、アジアの小さな島国のちっちゃい俳優にはなるな。もっと苦しみ、泥水に顔を突っ込んで、もがいて、苦しんで、本当にどうしようもなくなった時に手を挙げろ。その手を必ず俺が引っ張ってやるから」と。蜷川さん、そう言っていましたよ。

蜷川さん、悔しいでしょう。悔しくて泣けてくるでしょう。僕らも同じですよ。もっと一緒にいたかったし、仕事がしたかったです。

(略)

(スポニチ 2016・5・16 日号より)

〈ある日の衝撃〉

2015年8月30日、私は安保法案に反対する集会が開かれた国会前にいた。入れ代わり立ち代わり多くのスピーカーが演説をしていたが、「安全保障法案」ではなく、国民を戦争の中に巻き込んでいく「戦争法案」であるという法案そのものへの批判や、日本国憲法の立憲主義を踏みにじる行動であるという安倍政権の政治運営への批判が繰り返し語られていた。

この国会前に集まった人々はある共通の危機感から集まった人々、その危機感を共有する演説が当然のこととされ、「反対！という結論」を共有していることを表明する集会は、身動きすらままならない雑踏の中に立ち尽くしながらも、同じ主張を共有している者同士のある意味では平和で、しかし「おかしい社会」になっていくことへの異議申し立てという緊張感を湛える表情に満ちた、静かな混雑であった。

その時、関西から来た「ともか」と名乗る SEALDs KANSAI の女子学生がスピーチを始めた。(SEALDs: Students Emergency Action for Liberal Democracy-s の略)

安倍首相、私たちの声が、聞こえていますか！？

この国の主権者の声が、聞こえていますか！？

自由と民主主義を求める人たちの声が、聞こえていますか！？

「人の命を奪う権利を持つこと」を拒否する人間の声が、聞こえていますか！？

こうした政治集会ではあまり聞いたことがないフレーズと響きの声が聞こえてきた。その彼女の言葉を聞いているうちに、自分の目にうっすら涙が流れ出てくるのを感じ、私は慌てて雨空を仰いだ。彼女のスピーチは、それまでのスピーカーのどれとも違うものだった。彼女のスピーチは異質であり、感動的でもあった。なぜだろう？自分の内部に起きた強い感情の動きに少々慌てながら、それでも、彼女のスピーチを聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

彼女は、国会質疑においてある野党議員がイラク戦争の最中に、スンニー派教徒の多く住む町ファルージャへのアメリカ軍による激しく無慈悲な住民殺戮について、首相の見解を尋ねたが、委細がわからない出来事に言及はできないと彼が答弁を避けたことを紹介した。首相が答弁しないなら、彼女は私とその問いに答えます、と言い、

それは戦争犯罪です！

と断言した。集団的自衛権の名のもとに戦争状態の場に関わることを安倍政権が選択したことは、こうした戦場におけるアメリカ軍の行動に関与することであると指摘し、彼女は強い危機感を表明した。「人の命を奪う権利を持つことを拒否する人間の声」とは、彼女の内から響く声であった。

彼女の力強く、清新でそして雄弁なスピーチを聞いていると、そこに立つ一人の人間が、なぜこの法案に反対し、また政治運営の在り方に抗議しているのかを、きわめてその人自身の根源的な言葉で語っていることがわかる。そのことに私は自分の心の底が激しく突き動かされていくのを感じた。なぜだろう…？

彼女はそれに続けて、次のように「人の命を奪う権利を持つこと」を拒否する理由を語った。

すべての命には絶対的な価値があり、私はそれを奪う権利も、奪うことを許す権限も持っていません。なぜなら、いくら科学技術が進歩しても、私たちは死んだ人を生き返らせることはできないし、奪った命を元に戻すことはできないからです。

人の命を「奪う権利も、奪うことを許す権限も」持っていない「私」という根源から語る彼女の論理は、率直で力強く確かなものであった。小理屈でもなく、「人の命を奪う権利を持つこと」を拒否する人間の声という、まっすぐで平明な論理が彼女の肉声で語られていることに私は感動していたのだ。なぜだろう…？

彼女はさらに、自分がこの場で自分の意志を表明する理由を述べる。

今、この法案を許すことは私にとって自分が責任の取れないことを許すということです。それだけは絶対にできません。私はこの国の主権者であり、この国の進む道に責任を負っている人間の一人だからです。

70年前、原爆で空襲でガマの中で、あるいは遠い国で餓死し、失われていったかけがえない命を取り戻すことができないように、私はこの法案を認めることによってこれから失われるであろう命に対して責任を負えません。

安倍首相に語り掛け、自分の意思をこの場で表明する理由は、彼女が主権者であるということであった。主権者の一人として安倍首相に語りかけるスピーチは、彼女独自のものであった。「この国の進む道に責任を負う」一人としての、主権者たる者の責任が、他所からあるいは他者から与えられるものとしてではなく、自分自身が自らに課すものとしての責任が明確に告げられた。私はなぜか恥ずかしかった。

そして、その責任を持っている主権者として彼女が望むことが語られた。

私の払った税金が弾薬の提供のために使われ、遠い国の子どもたちが傷つくのだけは絶対に止めたい。人の命を救いたいと自衛隊に入った友人が国防のためにすらならないことのために犬死にするような法案を、絶対に止めたい！

国家の名の下に人の命が消費されるような未来を絶対に止めたい！

敵に銃口を向け、やられたらやるぞという威嚇をするのではなく、そもそも敵を作らない努力を諦めない国でいたい！

平和憲法に根ざした新しい安全保障の在り方を示し続ける国でありたい！

彼女が主権者として何を望み、いかなる日本社会でありたいと願うかが語られた。

私はこの国に生きる人たちの良識ある判断を信じています。国民の力を持ってすれば『戦争法案』は絶対に止めることができると信じます。

いつの日か、ここから、今日、この一見、絶望的な状況から始まったこの国の民主主義が人間の尊厳のために立ち上がる全ての人々を勇気づけ、世界的な戦争放棄に向けてのうねりになることを信じ、2015年8月30日、私は戦争法案に反対します。

(IWJ取材：阿部洋地、より引用)

聞き終えて、私は大きく息を吸いそして深く息を吐いた。彼女の降壇したステージには別の若者が立ち、いつしかあたりはリズムカルなラップの呼号に包まれた。

“民主主義ってなんだ！”

“これだ！”

“民主主義ってなんだ！”

“What democracy looks like?”

“勝手に決めるな！”

自分の生活の中に、その時々感動はある。けれど、彼女のスピーチに感じた感動は、そうしたものと別感動であった。私は自分自身に対するたくさんのなぜ？という問いをこの日から受け取った。

〈病院のベッドの上で〉

2015年11月初め、異様な息苦しさに襲われ、私は救急車で病院に搬送される途中意識を失った。目を開けると乳白色のカーテンが見え、鼻にはチューブが繋がれ、点滴の管が下がっているのが見えた。ああ、まだ生きている…。いつしかまた眠ってしまったようだった。集中治療病棟

の隣室には香港にいるはずの義兄の蜷川幸雄が緊急入院してきた。

“民主主義ってなんだ！”というラップが耳の奥で聞こえてくる。あの日感じた自分の戸惑い、あるいは感動がなんであったのか、病室で開いたラップトップにあの日のスピーチをアップして、繰り返し聞きながら考え始め、そして考えるうちにまた眠りに落ちた。あの問いに答えるには気力と体力が必要らしいということだけは知れた。繰り返し眠る。

〈…でいたい！〉

どのような社会でありたいのか、どのような社会ではありたくないのかという願い・渴望をスピーク・アウトする彼女のスピーチに対する自分の感動を再び強く思い返したのは、2016年5月に、義兄の蜷川幸雄が亡くなってからだった。

彼の遺体が自宅に帰ってきた晩、彼の書斎に明かりを点けると、部屋の中に多くの本や何冊もの台本が積み上がり、机の中央には演出プランや舞台デザインを描くのに使っていたたくさんの鉛筆があった。一本一本彼の手で削られた鉛筆が出番を待っているかのようだった。その机の上に一枚のカードが留められていた。

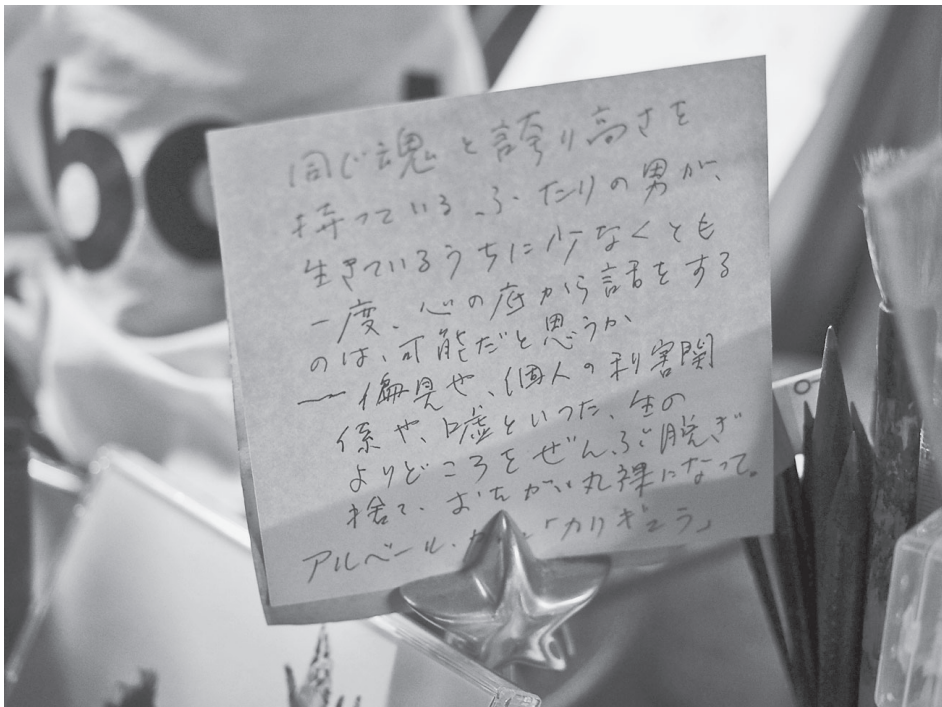
80歳の彼が机の上に一枚だけ書き留めていた言葉は、

同じ魂と誇り高さを
持っているふたりの男が、
生きているうちに少なくとも
一度、心の底から話をする
のは、可能だと思うか
——偏見や、個人の利害関係や、嘘といった生の
よりどころを全部脱ぎ捨て、お互い丸裸になって
アルベール・カミュ『カリギュラ』



であった。彼と初めて会ったのは、私が高校2年生の5月、姉と結婚した時。ちょうど校内で、カミュの『異邦人』読書会が始まった時期だった。カミュやサルトル、そして寺山修司、別役実、丸山眞男、フロイトをむさぼり読んでいた頃、彼はまぶしい輝きを放つ兄貴分だった。売れない役者やっているけど本当は演出をやりたいんだよ、と清水邦夫の戯曲『明日そこに花を挿そうよ』やボルフガング・ボルヒェルトの戯曲『戸口の外で』の演出プランを見せてくれた。好青年の顔立ちの彼が、熱を込めて語るのは、物知り顔に教訓を演じ説明する芝居ではなく、身もだえしながら己を語り、それともすれ違う自分のリアリティをさらに表現することのように見えた。二人で観に出かけた芝居小屋で、ふと気が付くと隣の席の彼はすっと立ち上がり独り出て行った。幕間の休憩でロビーに出ると、彼はいらいらした顔をして、こんな芝居、恥ずかしくて見てられないよと呟えた。演出したいのに叶えることができないもどかしさに鬱屈を貯めているように見えた。そして挑戦的な問いを一回り歳下の私に投げ掛ける。生意気盛りの私には、彼の挑戦的な問いが嬉しかった。カードに書かれた彼の文字を見ていると思い出す。あゝあの時と同じだ。彼は問いを自分にも他者にも投げ掛けながら人生を現役のまま駆け抜けていった。

彼の最後の演出劇『尺には尺を』の終盤、舞台奥から闇の中に一条の光が当たりその光の道を演者が歩いてきた。それはまだ彼が演出者として世に出る前に、稽古場公演として初めて演出したボルフガング・ボルヒェルトの戯曲『戸口の外で』において試みた演出と同じであった。闇の中に光る一条の道を大戦で死んだ兵士が我が家の戸口に入ろうとして演じられるその一幕物の芝



居を突如思い出した。「どうだ、凄いだろ、この演出プランは！」と演出絵コンテを見せてくれた彼の得意げな顔が浮かび上がる。彼はあの一条の光の道から現れ、その道を去っていくように感じられ、この芝居が彼の最後の芝居であることを思った。と同時に、その光の道を走り抜け、闇の中に消えるヒロインのセリフが、あの彼女のスピーク・アウトと重なって聞こえた。そのとき、句読点で息を切るセリフ回しを嫌っていた彼の演出の理由が解ったように思えた。そうだ、全身で言葉を発する時、ひとは息継ぎをしながら語ることはできない。彼は息継ぎを嫌ったのではなく、全身で語ることが役者たちに要求していたのだ。絶叫ではなく、全身で語ること、口先ではなく、全身で語ること…。口のスピードでは間に合わぬほどのスピードでありながら、明瞭に伝えるセリフ回し。それは、ほとぼしる思いを語り尽くすスピードであった。逆に、時に彼が用いた歌舞伎のだんまり（舞台の演者がみな無言で、スローモーションで動く）は、瞬間の中に消え行くものを表現する彼が好きな手法でもあり、その前後の息をつかせぬセリフを際立たせるものでもあった。スピーチの後に続く、あのラップの力強い全身の叫びに似た対比…。

ようやく、彼女の呼び掛けるあのスピーチに感じた感動がどこから来るのかが見えてきた。そして、その感動に揺さぶられた私自身、「…でありたい」を沈黙している私、が見えてきた。

〈「…でありたい！」の向こう側に見える

「…でありたい」を嘲笑する（あざわらう）文化〉

10 年ほど前、まだ福祉経営学部の専任教員であった時、卒論報告会場で学生たちが、当時飛躍的に拡大するフランチャイズ方式のビジネスモデルの分析を次から次へと誇らしげに報告した。そこで使われている勝利・成功の方程式は、正規社員を極限に切り詰め、学生バイトとパートという非正規スタッフが大半というビジネスモデルであった。学生たちに私の出した問いは一つ、「君たちは 10 年後の自分たちを正規社員として働いているものと想像しているのか、それとも昇給もなく、ボーナスもない安上がりの労働力と君たちが推奨している非正規労働者として働いていると想像しているのか？」であった。学生たちの答えは無言だった。その方程式は単純な欲望の極大化を示すものであった。その方程式は今も隆盛であり続けている。10 年後の今、かつての学生たちはどんな答えを持っているだろうか。

なり手の少ない 3K 職に海外からの働き手を導入しようという話がある。もちろん、スタッフ経費を安く上げるためでなく、将来、事業の海外展開をにらんで、海外スタッフを日本で研修しているという事業体もあるだろう。逆に、日本の学生たちが海外でこうした職業を得るために海外へ出ていく場合もあるかもしれない。国境を越えるグローバル化とは、企業ばかりではなく、仕事のある所への人口の流動化をも意味するからである。あの勝利と成功の方程式は、国民国家という国境の枠の中に一つの社会を形成する装置をその根底から崩していく可能性を持つ。日本の工場が閉鎖され海外に移転するなら、海外でその地の水準の給与でも良しとして働き始める時代はすぐそこまで来ているかもしれない。出かけた海外でも十分に支障のない生活が可能なる

ら、人口の移動が日本国内にとどまらず海外に向けて始まる可能性があるだろう。それはすなわち、少子高齢化がさらに加速化することを意味する。かつて若者たちが農村から姿を消していった集団就職のような時代がグローバルに再開されるなら、その動きを止めることは難しい。日本の賃金水準を海外途上国並みに下げることによって企業の海外流失を防ぐことができるであろうか。多くの若者たちを大都会に出してしまった日本の中山間や農村部の衰退はさらに深まる可能性があることになるだろうか。それとも、人々が去ることのない社会を日本は生み出し続けていけるのであろうか。

グローバル化の大きな流れの中で、この10年で非正規労働者の数は4割を超えた。不安定な雇用関係にある非正規労働者の収入で、夫か妻かどちらかの給料だけでは生活できないなら、そのような社会は見限って、海外への移住が選択肢の中に入ってくるであろう。まして、教育費の負担が先進国のトップクラスの日本よりも、海外の大学の方が社会の支援が厚い国々へ我が子を送った方が良い場合も出てくるであろう。そのような社会は世界中から若者たちを集めることになる。

私たちの社会が、あの女子学生が呼び掛けた「…でありたい!」という声に応えることのない社会なら、こうした読みが現実性を増すことになるだろう。若者たちに見限られた社会に、私たち中高年者たちが希望を持つことは苦しい。

〈勝ち負け文化がもたらすもの〉

山際寿一著『サル化する人間社会』によれば、ゴリラたちには、勝ち負けはなく、上下関係もない。喧嘩にも仲直りがある。互いに向き合って食事をし、時には食べ物を分け合うという。

他方で、サルたちの社会は、序列社会で弱いものはいつまでも弱いという。そして、群れから出た猿は、いったん離れた群れに愛着を示すことはないという。尤も、最近の猿山観察の成果として、ボス猿が山のトップにいるのではなく、母猿が影の頂点にあるという。そのことが猿山の秩序を作っているのかもしれない。ボス猿をフィジカルな秩序とすれば、母猿の作る秩序は、心理的秩序ということになるかもしれないというのだ。

勝ち負け文化は、人々を分断する。一度の勝負で敗者と勝者が決まり、勝者は何をしても正当化される文化。敗者はどこまでも無権利状態にされる文化。勝てば官軍であり、負ければ賊軍と呼ばれる。昭和50年ころ、私が会津地方の村で、昭和の大合併で慌ただしく消えた村の文書整理をしていた。そのとき、文書の束の中から既に廃棄されたはずの壬申戸籍が封をされることもないまま出てきた。頁をめくっていると、大きく赤い判子で「国賊」と押された頁が出てきた。士族と書いてあるからには会津戊辰戦争で戦った一人なのであろう。さらに文書の山の中から赤く国賊と記された戸籍が続々出てきた。何人もの戸籍に押された赤い国賊の文字を見ていると、後々旧会津藩において反長州の流れが消えていないことを思いさざるを得なかった。

私が担当していた政治学講義の中で、ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) の語った

民主主義の定義を紹介してきた。それは、「民主主義とは、多様な人々が共に生きる方法（A way of associated living）である。」というもの。つまり、異なる人々が共に生きることを選んだ時、誰にとっても公平なルールという意味での公共性が必要となる。論敵といえども「敵は殺せ！」は公共性になりえない。権利もまた、異なる人々が互いに安心して共に暮らしていくために必要な社会的装置である。これが無ければ、異なる人々は安心して一緒に暮らしていけない。敗者は黙れというのでは、鎮圧の上に平和を築こうとすることになる。民主主義とはそうならないための仕組みであるというのが、ジョン・デューイの定義である。

従って、ソーシャルとは、異なりながらも一緒に暮らしていくことを選んだ人たちの道である。均一な社会はありえないことを大前提とするこの民主主義という考え方に対して、均一な社会を作ろうとする方法は何だろうか。強制と排除、抑圧と圧殺による異なる他者の排除というヘイト・スピーチが行うような強面の分断だけでなく、規則という名を語る排除の手法もある。異なる人々が共に暮らすための規則でなく、排除を結果する（あるいは排除を目的とする）規則がある。かつて上海の外国人居留地にある公園の入り口には、『犬と中国人入るべからず』という看板が立てられていたというが、これもそうした規則である。上海を植民地化した外国人による、「中国人と犬」の排除、つまり権力を握った側が一方的に決めた規則において、規制される側は決定のプロセスに端から排除されているものである。中国人と犬は自らに立ち入り厳禁と決めたわけではなかった。私たちの社会はどのようなだろうか。

あの日のスピーチをした女子学生は、異なる人々が共に暮らすための呼びかけをした。そこがあの日の他のスピーチとの大きく異なる点である。勝ち負け文化は多様性を認めないが、彼女のスピーチはその人たちに向けて語られた。私の言うことに従いなさいという批判ではなく、私はこのように考えている、その声が聞こえていますか！と語るばかりである。彼女のスピーチには、その姿勢が強くあった。共に生きる社会を一緒に作っていこう！という呼び掛けである。

〈決まったことは守れ、敗者となった少数意見は黙れ〉は原則か？

『影の内閣』を国庫財源で運営する英国は「少数意見は黙るな」を原則とする〉

私が大学院時代に福島県会津地方の村々を歩き、その寄り合い文書を調べていた時、「村掟」と書かれた文書の中に、村八分の規定だけでなく、村八分解除のためのルールがあった。それは村（集落をここでは意味する）の決まりを破った場合には村八分の罰則を発動するが、詫びを入れるならば許すというものであった。破った項目の種類によって納める清酒一升の本数に違いがある。その背景を村人に尋ねた。驚いたのは、村八分という重い罰則を発動する理由であった。村の寄り合いは、村の全世帯の代表（男がいない場合は女の世帯主）が集まって何日か議論を続け、異論が出なくなった段階で村寄り合いの正式な議題として掲げるのが決まりであった。つまり、異論が出る間は決まらないことになる。それでも議論を続けて結論を得た場合、それを無視することは、この異論が消えるまで月日を掛けて議論を続けるという原則を無視することを意味

する。それ故、村八分に相当するのだという説明に、なるほどと思った。村八分は排除が目的ではなく、全員の意見が一致するまで議論を尽くすという原則を護ることが目的であった。それまで漠然と考えていた村八分とはまるで違うものだった。

さらに驚いたのは、異論があるのに多数意見で押し切るとどうなるのですかと尋ねた時であった。その答えは、村が分裂するさ、少数者を出してはならねえんだ、であった。深い！このことは、滋賀県の甲良町の集落を訪ね歩いた時にも同じことを聞くことになった。村の掟には、一人の少数者も出さないという深い哲学があったのである。

戦後の生活の近代化と町村合併による地域の拡大化の中で、多数決による物事の決定が進んでいくと、かつての村掟の「決まったことは守れ」という全員一致になるまで積み上げる原則の下で言われていたことが、新しい多数決という手法においても言われるようになった。とんでもない誤解である。

イギリス議会史の講義の中で、私が学んだのは、イギリスには「影の内閣」という正式な制度があるが、これは、議会の野党第一党は影の内閣を作らねばならないし、それは国庫で賄われるというものであった。議会第一党は政権党である。議会選挙で勝った党が首班指名を獲得する。野党第一党は、その与党とは異なる主張と見識を「影の内閣」で鍛え、次に備えよ、と英国社会全体が命じているのだ。それが国庫負担の意味するところである。（日本でも野党第一党が影の内閣を作っているが、国庫で作る正式なものでなく、野党が勝手に作っているだけである。）

何故か、多数意見が正しいのではなく、意見が多かったことを意味するのであって、場合によっては、崖を落ちるトップランナーの可能性もある。その危険性やマイナスを指摘し続けることが影の内閣の役割であり、英国社会の現実的な安定的変化を準備するものというのが本質である。それ故、多数意見が勝ったのだから、少数意見は黙れ！という原則はないことになる。むしろ逆である。警鐘を鳴らし続け、自分たちの政策を磨き、次に備えよと社会全体が命じている。それが健全な国家運営の基礎であるという英国の見識とも言えよう。これを少数意見の尊重というのである。少数意見を尊重することにより、少数派だけでなく社会全体そのものを守ろうとする見識である。ソーシャルの意味がよくわかる。

〈多数決で決めるのだから、多数派を取れば、なんでも決められるのか？ 逆に、少数派は常に敗者であり続けるのか？〉

議会において多数決で決めるとして、なんでも多数決で決められるのだろうか？たとえば、ナチ政権下のドイツ国会が決定した「遺伝病子孫予防法」において、躁うつ病、先天性○○○など精神障害、身体障害者をガス室で処分することを正当化する法律が作られたケースを見てみよう。生産性の低いか、ない者は社会的存在価値がない者であり、その看護や介護のための社会的負担は無駄である。それ故、断種・不妊手術あるいは処分死が相当であるというこの法律を実行する T4^注作戦と呼ばれる政策によって、40 万を超える断種手術が行われ、20 万を超える障害者

が処分＝虐殺された。合法的かつ正当にである。戦後、基本的人権規定が基本法、憲法に織り込まれ、多数派が多数決で押し切ろうとしても越えてはならない歯止めとして、基本的人権を位置づける憲法を置いた。これが立憲主義である。社会の暴走を止める安全装置としてあるこの基本的人権が機能しないとき、国家はアクセルだけの自動車となり、ハンドルさばきだけが頼りとなる。それは少数意見の警告を無視した破滅への第一歩となる。国家が多数派の私物となることを避ける公共性の基盤となることこそが、この憲法の役割である。

成文憲法のない英国において、その公共性の基盤はオープンな議論である。議論のプロセスこそ公共性の基盤であり、ブレア政権がマニフェストで明記した ID カード法案も上院を通るまでに 12 回の修正を余儀なくされたというのもこのことが生きた原則として機能していることを物語る。日本のような党議拘束がないアメリカでは、与党の中にも意見のねじれがあり（多数派 ≠ 多数意見）、大統領の提案が通らないこともある。議会のねじれとは、議論の健全性を物語るものですらある。党議拘束は議会というオープンな場での議論の意味を消滅させ、多数決という形式性にだけ正当化の論拠を求めることになり、公共性を弱体化させる恐れの高いものである。

オープンな議論を第 2 の歯止めとするならもう一つの最後の歯止めは、主権在民である。あの日の彼女が繰り返し語った「主権者のひとり」という言葉が、選挙を通じてであるとしても、あるいは議論を通じてであるとしても、少数意見者として排除されることはない。その主権者の位置は消えることがないし、排除されることはないからである。

三つのどれかが欠けた時、公共性は危うく、勝った側の合法的な独裁化が懸念されるのである。私たちの社会は、どうなのであろうか。この社会の中に多くの小さな組織や集団、あるいは緩やかな地域コミュニティがあるが、そこに他者を排除しない公共性が息づいているだろうか。

〈子ども扱いをする文化と社会の未来〉

ある病院に入院していた時、看護の実習生が病室にきて、私の枕元に膝まづいて、優しい声で、こう尋ねてくれた、「おじいさん、お元気ですか!？」。私は一瞬絶句して、笑い出した。若い実習生はきょとんとしている。

その時私は 64 歳。確かに 20 歳前後の彼女からすればオジイサンなのだろう。でも私の末っ子もまだ 19 歳だったから、私は父ではあってもオジイサンではなかった。まして見知らぬ実習生のお祖父さんでもない。彼女は優しい呼びかけの言葉として「オジイサン」を選んだのだろう。私は、自分にはちゃんと名前があること、これからはその名を呼んでくださるのが良いと伝えた。普段、この病院の看護師のみなさんがそうしているようにである。

だが他の病院に入院した時、この実習生と同じように扱われた。私は歳を取っているけれどオジイサンと呼ばれたくないと告げたが、ああそうですかと返事が返ってただけだった。会議があるので、外出したいと言うと、あなたは病人でオジイサンなのだから、仕事をしたり、働いたりすることは止めなさいとたしなめられた。これにはムッときた。私が働くことをとやかく言わ

れる筋合いはないと返したが、その後、娘に赤ん坊が生まれ本当のお祖父さんになったと嬉しそうに話していたら、件の看護師がやってきて名実ともにお祖父さんなのだから病人だけしていればよいのですと、子どもを諭すように優しく、でも慇懃無礼に言われた。啞然とした。自分の言っていることに彼女が一片の疑問も持たないでいることに驚愕したのである。

50代になって、足の骨を右左交互に3年続けて骨折し、車椅子で東京と名古屋を往復したことがある。改札からホームまで行けるエレベーターが完備されていない時代であったため、その度に、駅員の皆さんに押してもらい地下の業務用エレベーターを使いながらホームとの行き来をサポートしてもらった。そのとき不思議なことに気が付いた。どの駅員さんも大変丁寧に優しく、赤ちゃん言葉で話しかけてくれたのである。人によると、「ガターン、ゴトーン、ガターン、ゴトーン、左に曲がりますよー!」と音声付きで押してくれる。これは優しさの表現なのである。うとすぐにニッコリ理解したが、次の駅員さんになっても、似たり寄ったりであることが判ると、これらの優しき人々が、車椅子の怪我人を赤ちゃんや幼児を扱うようにすることが「優しさ」の表現であると信じていることが知れた。毎週のようにガターンゴトーンと車椅子を押していただいた。

高齢者を子ども扱いするのも、障害者や怪我人を子ども扱いするのも、優しさの表現としてやっていること、つまりひとかけらの悪意があるわけではない。しかし、人としての敬意のひとかけらも感じなかった。なぜこんなことがひろがっているのだろうか。ひょっとして、マニュアルがあるのだろうか?…!!!

私が高校生になったとき、教師たちは私たちを大人として扱いますと告げ、「子どもだからその問いは判りません」と答えると、「君は、お子様か!？」と逃げることを許さなかった。あるいは、教師たちは「子どもにはわかるまい!」という捨て台詞も吐かなかった。40年後、その高校に長女が入学すると、同じことを教師に言われた。それがその高校の伝統であるのを知ったのは、私がその学校を卒業して40年後であった。大学に入ると、学生を子ども扱いする多くの教員に会った。けれど、我々を大人として扱い、手抜きのない議論を繰り広げる教員にも出会った。それ等の教員との議論は、今となっては大事な私の財産に思える。生徒、学生を子ども扱いない学校の中で私は育てられたのだと今は思う。

相手を子ども扱いしないこととは、対等な立場で敬意をもって相手と話し、尋ね合うことであるとするなら、逆に、相手を子ども扱いすることとは、自分を大人として位置づけ、相手を子どもとして置き、「私の言うことを聞け!」とすること。「子どもは大人の言うことを聞くもんだ!」というこの姿勢からは、家父長制や家母長制の抑圧と抹殺の匂いが立ち込めてくる。

三人の子が次々と小学校、中学校、高校と上がり、夫婦交替でPTAや三者面談などに出るようになって、自分の子どもの頃との大きな違いに気づくようになった。その最たるものは、子どもたちの校内ルールがすべて学校によって決められていたことだった。私が小学生であったとき、ルールは学級会で検討した上で学級委員からなる全校児童会で決められていた。しかし、私の子どもたちには、全校児童会そのものがなかった。ホームルームの時間は学校からのお知らせ

を聞く時間で、もはや自分たちで議論する時間ではなかった。中学校でも状況は同じであったという。子どもたちも私と同じ小学校から中学校に行ったのだから同じだと思い込んでいたのだが、1970年代半ばからそうなったのだという。子どもたちの行った高校はどれも生徒を子ども扱いする学校ではなかったのは幸いだった。

一方的に、「私はルールを作る人、あなたはそれに従う人」と決めつけるところには、あの彼女（「ともか」）が言うような「…でありたい！」を許す空間は乏しい。むしろ、「私の考え方に従いなさい！」と言われる可能性が見えてくる。それは何をもたらすか…？

ルールを自分たちで議論することを許さない社会とは、社会そのものの方向性やありかたは既存のものに従えという社会である。それが、世に言う「同調圧力の高い社会」であるとするなら、ここに新しく入る人々は、自分の希望は何も語らないだろう。それは自分たちの社会を自分たちで作れない社会である。その先には二つの道がある。一つは、「…でありたい！」と願うことをやめること、願うだけ無駄なのだから、自分たちを除外したどこかでルールや社会が作られるなら、自分たちはこの社会の外にある、だから何も語らない、関係ないじゃん！という道である。もう一つの道は、この社会を出ていくことである。グローバリゼーションの時代、いたるところに青山あり。若者たちはこの家を、この学校を、この職場を、この町を、この社会を、この国を出ていくであろう。そこに残るのは、すべてのものが揃っているのに、空き部屋、空き家、空き学校、空き職場だらけの町 Empty Towns が満ちる地域そして社会だ。

そこにあるルールがどれほど啓蒙的正しさに満ちていようと、ルールだから守れと言われるなら、自発的美意識の要素は失われ、ルールは命令と服従の象徴と化していく…。我が家の玄関先に鉢植えの花を並べていた。それがあの日、その中の二鉢がいつの間にか消えていた。誰かが持って行ったようだ。そこで、「花盗人の方へ、大事に育ててくださいね」という小さな札を掲げた。二度と盗まれることはなかった。毎日のように、玄関脇の花壇に犬の糞をしていく人があった。よくある警告の市販ボードには「ここはトイレではありません。自分で始末してください」とある。その札を花壇に刺す気になれず、妻がB6版の小さな自家製のコラージュを作った。いろいろな犬のコラージュを貼り、そこに「くそ」「糞」「shit」「クソ」の小さな文字を付けた。ぴたりと止んだ。そうなんだ、人間の美意識に訴えるほうが伝わりやすいのだ。町中にルールが貼られる街より、美意識が分かる街のほうが心地よい。この町でも家でも職場でも学校でも、自ら決めたルールなら書き出す必要もない。昔からトイレに「いつもきれいに使っていただいてありがとうございます」という札があるのは故あることなのだ。

誰かが作ったルールが「俺はルールだ！守れ！」とそこら中に貼ってあるとき、人は自分がこの社会の部外者であることを知るだろう。1970年代に子どもたちが自分たちで作るルールが姿を消し、学校側が決めて子どもたちに守れと言うようになってから校内暴力が話題になり、それも管理強化の中で消えていくと、子どもたちの無気力化といじめが話題になった。それはこの社会のありかたへの子どもたちからの回答なのだと考えるなら、この家、この学校、職場、地域、社会がやがてemptyになることを予感させる。一度emptyになった場所に若者はやってこない。

先行する若者たちが残したメッセージがあるからだ。ここは自分たちの生きる場ではないよと。

〈ラップの声の意味するもの〉

あの日国会前にあふれていた若者たちの、

“民主主義ってなんだ！ *What democracy looks like?*”

“これだ！”

“民主主義ってなんだ！”

“*What democracy looks like?*”

“勝手に決めるな！”

というラップの歌詞が何を意味し、そして「ともか」の「…という社会でありたい！」という言葉が何を語っているか、ようやくはっきりと私に見えてきた。どんなに啓蒙的正しさに満ちていようとも、若者たちにルールや答えを押し付けてくる社会に明日は見えないということ。畏兄蜷川幸雄の葬儀に途切れることなく続いた老いた人々から若き人々、その自らやってきた人々の中から社会は生まれ行くだろうこと、60歳以上の俳優希望者募集で始まった「彩の国1万人のゴールド・シアター2016」に彼の死後も多くの希望者が集まったように、あの高齢者演劇集団「さいたまゴールド・シアター」による清水邦夫の戯曲『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』（香港・東京・パリ・豊橋で公演）を演出する彼が64歳から88歳の女優たちに時に浴びせた罵声は、「それが日本のババアか！」であった。女優たちの背筋が伸び、毅然と誇りに満ちた演技が始まる。細々しくこうしろとは言わない演出。自らの違和感を役者に告げ続けることで演出はするが、正解を決して配給しようとはしなかった、そこに多くの役者が育った。本稿冒頭に紹介した藤原竜也の弔辞を葬儀の会場で聞いたとき、ひたすら鳥肌が立った。今、その意味が、「ともか」の言葉の意味と同じようにはっきり見えてくる。私の中に言葉が湧いてくる。

異なる他者にとぎやかに生きることを選びなおそう、多様性を排除するのではなく、それを力とする社会が生まれていくことを願って。

注)

T4 作戦については、NHK ハートネット TV『障碍者と戦争（ナチスドイツ）：障碍者の殺計画と T4 作戦』<https://www.youtube.com/watch?v=ydIhTgDBZC4> をぜひご覧下さい。2016 年 6 月 18 日に開かれた「平和と人権・福祉」をテーマとする第 48 回の日本福祉大学社会福祉学会において、上記の番組に深くかかわった、特別ゲストの藤井克徳氏：日本障害フォーラム幹事会議長、NPO 法人日本障害者協議会代表、きょうされん専務理事、WAsia（障害者就労事業のアジアネットワーク）代表、公益財団法人日本精神衛生会理事の感銘深い貴重な公演を頂いた。

参考文献：

『我らに光を…さいたまゴールド・シアター 蜷川幸雄と高齢者俳優 41 人の挑戦』（徳永京子、川出書房新

What democracy looks like? 民主主義ってなんだ!

社, 2013 年)

『蜷川幸雄の仕事』(蜷川幸雄・川口宏子ほか, (株)新潮社, 2015 年)

『鴉よ, おれたちは弾丸をこめる』: <http://eiga.com/news/20160619/15/1/01/>